平成２２年度　大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業　報告書

福島県西会津町上谷地区地域調査
～いきがい拠点を目指して～

宮城教育大学　小金澤研究室

仙台いぐね研究会

Ⅰ　はじめに

１．団体概要～仙台いぐね研究会とは～

私ども、仙台いぐね研究会は現在（平成 22 年度）、大学 3 年生が 8 名、大学 4 年生が 3 名、大学院生が 4 名、教員留学生が 1 名、東北大学からのインターン生が 1 名の総勢 17 名で活動しています。会員のベースとなっているのは宮城教育大学で、人文地理学を専攻している小金澤研究室のゼミ生になっています。

みなさん、気になっていると思われる「いぐね」は仙台平野にある屋敷林のことです。漢字では居久根や家久根と書きます。開墾地であり、里山の恵みを享受することができなかった仙台平野の先人たちが、里山の恵みを得るために様々な木々を植えた、人口の里山が「いぐね」なのです。私たちはこの「いぐね」を活用し、持続発展教育（ESD）の実践を小学生に行っています。

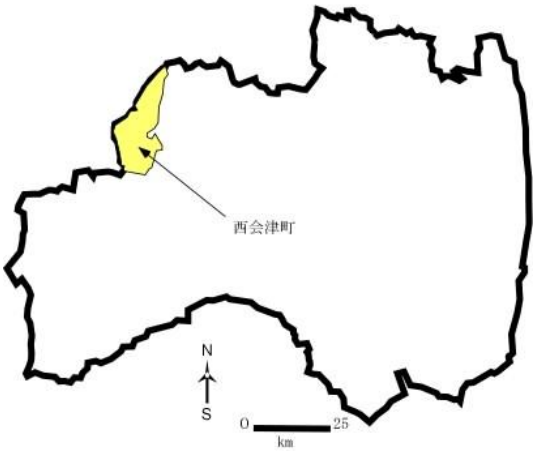
地域づくりや集落の活性化では山形県金山町で休校を活用し、地元のそばが味わえ、そば打ち体験、宿泊もできる「がっこそば」という動きを支援しており、また宮城県栗原市有壁地区において、ブラックバス被害が報告されていたため池の池さらいを行い、池さらいを学生と集落の方々が共同で池さらいをやることで、失われていた共同作業を取り戻しました。

このように仙台いぐね研究会では地域に眠っている資源を活用し、持続発展教育や地域づくりを行っています。

２．地域概要～西会津町上谷地区を取り巻く状況～

西会津町は福島県の西北端に位置し、新潟県に接しています（図表 1）。西会津町の面積は平成 22 年において 298.13 ㎢であり、そのうち約 3 分の 1 にあたる 105.67 ㎢が山林となっています。山林の多さからもわかる通り、西会津町には最高点である荒岩山（1579.9m）を筆頭に、数々の山々に抱かれた町になっています。今回、ともに活性化事業を行った上谷地区も例外ではなく、会津百名山の一つである飯谷山がそびえ、かつては桐や杉の名産地でした。しかし、輸入木材との価格競争に負けた国産材は需要をなくし、名産地であった上谷地区でも木材価格はピーク時の半値以下にまで下落しました。このため林には人の手が入らなくなり、森林の放棄による荒廃が問題となっています。この森林の荒廃は、ただ木材を失うということではなく、森林が育んできた山菜、湛えてきた清水といった地域の魅力となる資源を失うことに

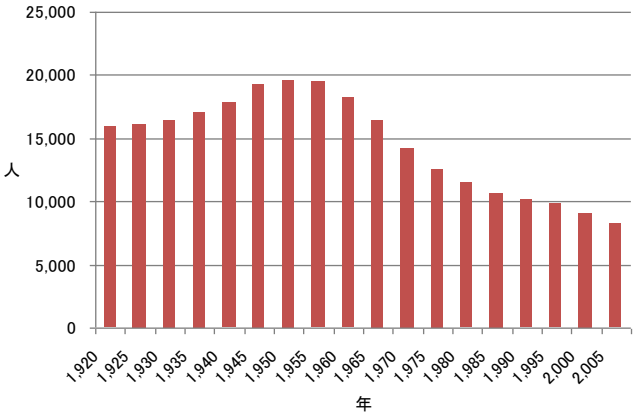
図表１　西会津町の位置



なります。幸いにも上谷地区では末期的な段階までは到達していませんが、このまま放っておいては手の打ちようがなくなることは確実です。

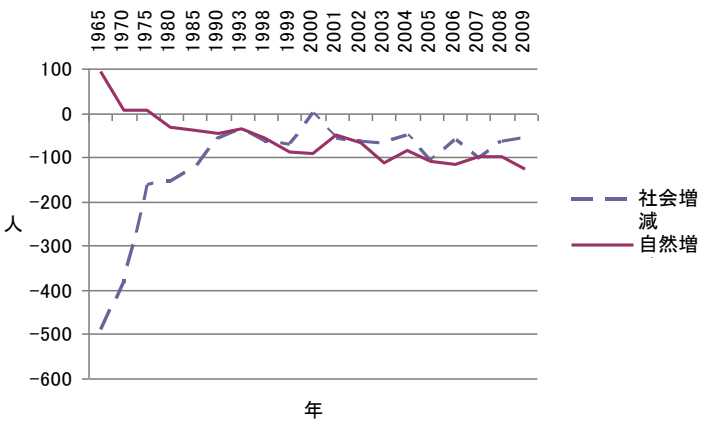
また、西会津町は町全域が特別豪雪地帯に指定されており、1 月の降雪量は 227 ㎝にも及びます。積雪によるスリップで車が 300 台以上も立ち往生したことは全国ニュースにもなり、みなさんの記憶にも新しいのではないでしょうか。特に今年度は積雪量が多く、平成 23 年 2 月に上谷地区を訪れたところ、例年の 3 倍は降ったというお話を聞きました。

図表 2　西会津町の人口推移



しかし、雪かきに必要である若年層は町に残っていません。西会津町の総人口は平成 17 年の国勢調査によれば、8,237 人であり（図表 2）、このうち65歳以上の割合は39.7%を占め、平均年齢は 52.9 歳と高齢化が進行していることがわかります。この高齢化の進行とともに、西会津町では人口の自然減少が昭和 50 年以降発生しており、加えて人口の転出者超過である社会減少は昭和 40 年以降、一貫して起きています（図表 3）。このように西会津町では高齢化、過疎化が深刻化しており、平成 22 年には町全域が過疎地域に指定されました。しかし、上谷地区はこの西会津町の現状以上に高齢化、過疎化は深刻な事態となっています。上谷地区は男性 28 人、女性 35 人、合計 63 人の地域ですが、高齢化率を、上谷地区を構成している集落ごとに見ていくと程窪集落が 50%、泥浮山集落が 100%、長桜集落が 44.4%、小杉山集落が 50%になっています。また、世帯数は程窪集落が 7 世帯、泥浮山集落が 5 世帯、長桜集落が 6 世帯、小杉山集落が 9 世帯と高齢化にあわせて過疎化も進行していることがわかります。こういった状況下にある中、上谷地区では雪かき、雪下ろしなどの集落維持作業は年々厳しくなり、集落の存続について危機感を持っているのが現状です。

図表 3　西会津町における人口増減の変化



Ⅱ　調査方法～上谷地区の潜在的な力を明らかにする～

私たちは上谷地区を調査するにあたり、4 つの問題意識、目標を持ちました。

①上谷地区の目玉を把握する。

少子高齢化が進行している上谷地区の活性化を模索するためには、地区外から人が訪れる必要があると考えました。そのために、上谷地区に眠っている集客力、言わば地区の『売り』を見つけ出すことを目指しました。

②上谷地区で営まれている生活を明らかにする。

①と重複する点がありますが、山に抱かれている上谷地区の生活は私たちが生活している平地、都市部とは異なっていると思いました。住民の方々にとっては日々の何気ない生活でも、異なった地域の人にしてみれば魅力に溢れています。生活の中に隠れた魅力を、『よそ者』との交流の中で、住民の方々に再発見してもらうことを狙いました。

③上谷地区を支えている基盤を整理する。

過疎化は人口の自然減だけでなく、他市町村への流出という社会減も大きな原因となっています。私たちはこの流出先、また帰省頻度を明らかにすることによって、上谷地区には居住していないものの、集落の集まりや農作業といった地域活動を支えている人的な基盤が、どの程度存在しているか計ることにしました。この人的基盤を明らかにすることで、上谷地区が有している労働力、ひいては集落を維持していく力が明らかになると考えました。

④上谷地区に必要なものを見出す。

上記の 3 点を踏まえ、上谷地区の魅力、また集落を維持していく力を発揮していくために上谷地区に必要であるものを見出すことを最終的な目標としました。

　これらの問題意識、目標を達成するために私たちは以下に挙げる 3 つの手法を用いました。

①お宝マップづくり

上谷地区、4 集落ごとに景観調査、住民の方へのヒアリングを行い、各集落の見どころ、自慢のポイントを地図化しました。住民の方にとっては日常の風景であっても、来訪者にとっては雄大な景色、癒される景色が数多くあり、各集落が持つ『売り』を明らかにできました。さらに地図化したことにより、上谷地区全体で『売り』を共有化することもできました。また、お宝マップには来訪者のことを考え、駐車ができる場所、道幅が狭くなっていたり、傾斜が急であったりと移動するうえで注意が必要であるポイントもまとめ、集落内の自己満足で終わらないように注意しました。

②上谷地区料理展覧会の開催

私たちが上谷地区に滞在し、営まれている生活に触れた中で、もっとも地域外と異なり、魅力的なものは郷土料理であると感じました。山菜やキノコ、ワサビといった山の恵み、雪深く、交通が不便であったことから生まれた乾物や車麩などを調理する技が郷土料理一つにもふんだんに盛り込まれていました。しかし、住民の方は日々の生活の一部であるが故に魅力を感じず、もてなしの場には相応しくないとまで感じていました。そこで上谷地区の各家庭から一品、郷土料理を持ち寄っていただき、バイキング形式に並べることでど

のくらいの料理が上谷地区にはあるのかを確認しました。また、確認した料理は写真とともにレシピをまとめ、季節ごとのレシピ集を作成しています。このレシピ集には材料から山の恵みを感じられるだけでなく、調理のポイントを抑えることで上谷地区に伝わる技の素晴らしさが伝わるように工夫し、上谷地区で営まれている食生活の魅力に溢れるものにしました。

③親戚ネットワークの調査

上谷地区を歩いてみると、見事な田園風景が望めます。もちろん生産性に乏しい山奥の狭小な水田は耕作放棄地となっているものの、基盤整備が行われた水田については耕作放棄されておりませんでした。少子高齢化の中にある上谷地区においてどういった労働力が田畑を含めた集落の維持を担っているかを明らかにするため、各集落の方にヒアリングを行い、子ども、孫世代がどこに流出し、帰省頻度はどの程度かを明らかにしました。現在の交通網が発達した社会において、集落の維持するための基盤を明らかにできたと思います。

Ⅲ　調査結果～上谷地区に隠れていた魅力～

上記の調査方法によって、私たちは上谷地区に隠されていた様々な魅力を明らかにしました。

まず景観調査、ヒアリングを通じたお宝マップづくりでは上谷地区に共通するお宝、各集落特有のお宝がありました。上谷地区は各集落に自慢の清水があり、住民の方々の生活に根付いていました。例を挙げれば程窪集落には水を祀った神社があり、岩場からこんこんと清水が湧き出ていました（図表 4）。また、長桜集落のブナ林では森が湛えた水を味わうこともでき、泥浮山集落では集落のはずれに一貫清水が湧いていました。これらの清水は集落の人が日常的に使用するだけではなく、他市町村の親戚、知り合いに頼まれて送ってあげるほど水です。共通するお宝としては森の恵みとも言える山菜、キノコが挙げられます。景観調査では道端には山菜が自生しています。山菜では長桜集落が管理しているワラビ園もあり、ここでは 2000 円でワラビが採り放題になっています。品質がよいのでワラビの販売業者も訪れ、毎年 350 人程度が訪れる知る人ぞ知るスポットになっています。また、キノコに関しても上谷集落のまとめ役である田崎さんはきのこマイスターとして活躍したおり、ナメコ、シイタケ、キクラゲ

図表 4　程窪集落の清水

図表 5　原木栽培のナメコ

など様々なキノコを味わうことができました。特に生キクラゲの味は格別で、ワサビとあえていただきました。泥浮山集落の伊藤さんもキノコ栽培を行っており、実際に採らせていただいた原木のナメコは今まで見たこともないくらいの大きさで、歯ごたえ、味わいともにこれまでのナメコの認識を覆されるものでした（図表 5）。

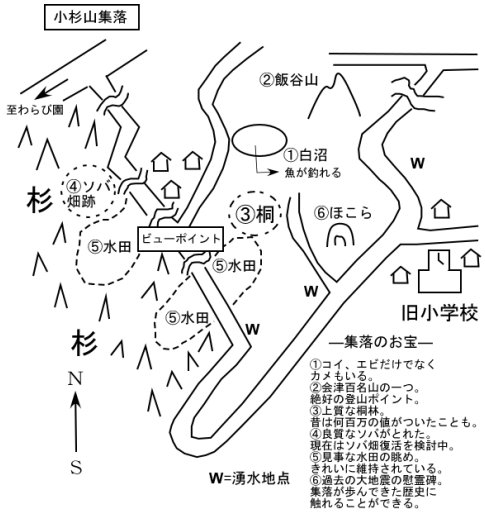
次に集落ごとのお宝、見どころを挙げていきたいと思います。まず程窪集落では水が豊かな上谷地区でも特に水に恵まれており、来訪者の方が簡単に水を汲むことができる集落です。また、この豊かな清水によって天然のワサビが自生し、これも簡単に採ることができます。先ほどのキクラゲのワサビあえもこの天然ワサビを使いました。泥浮山集落は以前、養蚕を生業とされていた方が多く、珍しい二階建ての古民家が並び、立派な蔵も残されていました（図表 6）。また、道路わきにはバッタリーの跡もあり、古民家をはじめとする昔の居住形態が泥浮山集落の見どころだと思います。また、長桜集落には先ほどのワラビ園があります。長桜集落は杉、桐の林業を行っていた方が多かったことから、山林はよく手入れがされており、光が差し込む綺麗な山林を見ることができます。この山林によって国蝶であるオオムラサキも自生しており、オオムラサキが舞うところを撮ろうと毎年カメラマンが訪れる集落でもあります。最後に小杉山集落の見どころは何と言っても、西会津を一目で見渡せる眺望です。上谷地区で最も標高の高い小杉山集落には展望台が設けられ、東屋も建てられています。この東屋には樹齢 200 年のナラで作ったテーブルとイスが用意されており、森の雄大さを感じながら休み、そして上谷集落一の眺めを堪能することができます。このように、日常に埋もれてしまっている数々の上谷地区の魅力をお宝マップとして地図化することができました（図表 7、8）。

次に上谷地区料理展覧会（図表 9）では、お

図表 6　泥浮山集落の古民家

図表 7　小杉山集落のお宝マップ

図表 8　整理後の小杉山集落お宝マップ



図表 9　上谷地区料理展覧会の様子

図表 10　上谷地区地元料理の数々

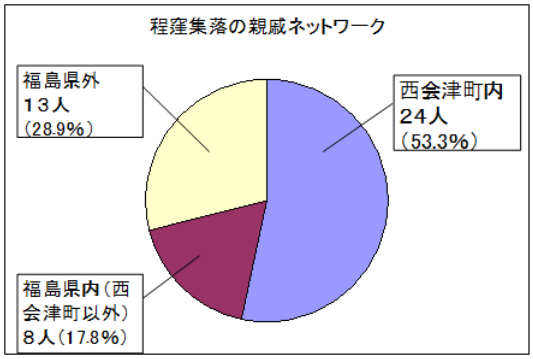
宝マップづくりで明らかとなった山の恵みに加え、その恵みを最大限活用する技にスポットを当てました。まず集落の方にどのくらいの料理が眠っているのか実感していただくため、料理を一つのテーブルにまとめました（図表 10）。集落の集まりで料理が出されることはあったそうなのですが、それぞれのテーブルにバラバラに配置していたため住民の方々は出された料理、全てを見たことはなく、配置を変えただけではあるものの、上谷地区にある地元料理の多さを実際に目で見て実感でき、とても驚いていました。この料理展覧会には数多くの地元料理が出され、会津地方の郷土料理であるこづゆも振る舞われました。このこづゆは会津地方では冠婚葬祭に欠かせないポピュラーな郷土料理ですが、作り方は非常に手間のかかるものでした。干し貝柱をだしに使うのですが、前日から水で戻してだしをとっていきます。普段、ほんだしや味の素などインスタントのだしに慣れてしまっている私たちにとって、こづゆの手間、時間のかけ方はとても新鮮で、日々の生活を振り替えさせるものでもありました。この他にも身欠ニシンや棒タラ、塩蔵して保存していた山菜が使われた料理もあり、内陸であり、冬には雪に閉ざされてしまう西会津で生き抜いてきた知恵を感じることができました。この知恵、そして手間が今なお残っているということが上谷地区の魅力の一つであると思います。また、上谷地区の料理に眠る魅力はこれだけではありません。冬が手間を感じることができる料理なのに対し、山菜が顔を出し、山の恵みに溢れる春は冬とは違った料理を味わうこともできます。しかし、山の恵みをより強く、ダイレクトに味わえる春の料理にも数々の技があることは変わりません。例を挙げればワラビの灰汁抜きをするときには、アザミの茎と一緒に煮るとよいなど、私たちの知らない技が使われています。この料理に隠れている技の一つ一つが上谷地の魅力であると思います。そして現在、この魅力を整理するために上谷地区のレシピ集を作成中です。レシピ集には材料、下ごしらえを含めた手順はもちろんのこと、料理に地元食材がどのくらい使われているかを示しています。料理を作ってくださった方々にお話を伺うと、使わ

図表 11　ヒアリング調査の様子

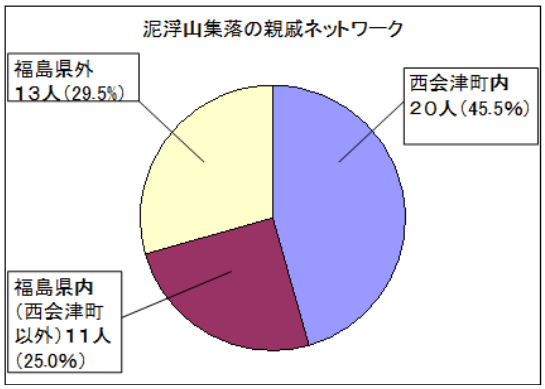
れている食材の多くが地元のものでした。このことがしっかりとしたデータとして示すことができれば、近年注目されている地産地消、食育の面からも上谷地区に魅力が加わると思っています。

最後に親戚ネットワークの調査では、子ども、孫世代の居住先、帰省頻度を集落の代表者へのヒアリングを通じて明らかにしました（図表 11）。そして居住先については、西会津町内、西会津町以外の福島県内、福島県外という 3 つにまとめました。小杉山集落については居住地を把握できた件数が少なかったため、整理することができませんでしたが、残りの 3 集落についてはヒアリング、分析を通じ、上谷地区が実に多くの転出者によって支えられていることがわかりました。上谷地区は限界集落化が進んでいるものの、集落を支える力に関してはまだまだ温存されていました。地域概要にも書きました通り、上谷地区の 4 集落は、程窪集落が 7 世帯、泥浮山集落が 5 世帯、長桜集落が 6 世帯、小杉山集落が 9 世帯と、いずれも 10 世帯未満の小さな集落であり、人口に関しても上谷地区全体で 63 人となっています。しかし、子ども、孫世代の転出先を見てみると西会津町内への転出が、程窪集落で 53.3%、泥浮山集落で 45.5%、長桜集落で 37.5%といずれも転出先の中で最も多く、人数にすると各集落ともに 20 人前後が同一町内という極めて身近なところに居住していることがわかりました。（図表 12、13、14）また、西会津町以外の福島県内への転出は程窪集落で 17.9%、泥浮山集落で 25.0%、長桜集落で 27.1%となっており、各集落 10 人前後が町内ではないものの、福島県内への転出になっていました。さらに、福島県内での転

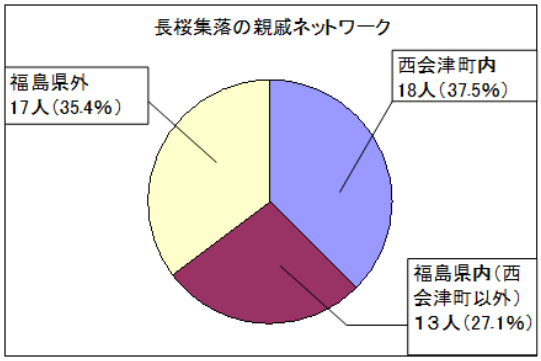
図表 12　程窪集落の親戚ネットワーク



図表 13　泥浮山集落の親戚ネットワーク



図表 14　長桜集落の親戚ネットワーク



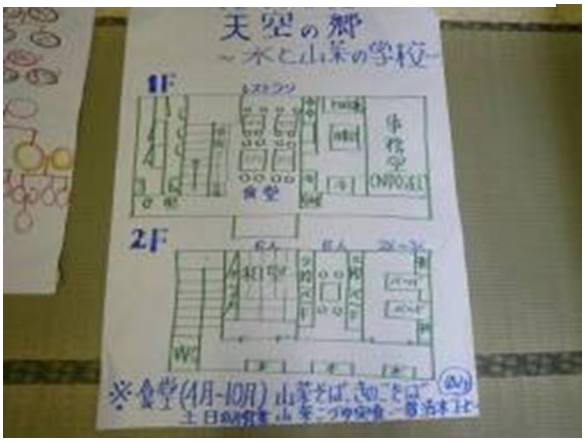
出先としてはどの集落でも郡山市、会津若松市、会津坂下町が多くなっています。この 3 市町は磐越自動車道で結ばれているラインであり、それぞれの市町がインターチェンジを有しています。西会津町にもインターチェンジがあり、高速道路が整備されることにより、福島県内へ転出したとしても集落を支えやすい状況にあると考えられます。実際に私たちが景観調査、ヒアリングを行う際に協力してくださった方々の多くが郡山市、会津若松市に住んでいらっしゃる元集落民であり、集落の集まり、農作業の繁忙期、さらには親世代への日々の世話についても行っているとおっしゃっていました。確かに上谷地区では限界集落化が進行しているものの、高速道路が力を発揮している転出人口は各集落ともに 30 人前後おり、これらの転出人口は上谷地区を維持していくうえで欠かすことのできない存在であることが明らかになりました。

Ⅳ　上谷地区への提案～いきがい拠点『天空の郷』を目指して～

今回の調査結果を踏まえて、私たちは今後の集落づくりの方向性として『天空の郷』という交流・いきがい拠点を提案しました（図表 15）。この『天空の郷』が目指すポイントは次の 4 つです。

①休校となっている小学校の活用
②来訪者、親戚が春・夏・秋に自由に訪れられる宿泊、交流施設の整備
③地元の水・農産物・料理の活用
④地域住民、親戚ネットワークによる運営主体の組織づくり

図表 15　『天空の郷』設計図



まず第 1 点の休校となっている小学校の活用ですが、この小学校は上谷地区のほぼ中央に位置しており、各集落へのアクセスも良好です。私たちが調査を行う際にもこの小学校を拠点として活動していました。（図表 16）さらに、上谷地区全世帯の方を収容することも可能であり、思い出の詰まっているこの小学校を休校として放置しているのではなく、薄れつつある集落住民間のつながりを保ち、再度つながりを持ち直すためにも重要な拠点に成りうると思います。また、校舎内部も広く、痛みも少なく綺麗であったことから、交流拠点として活用できる可能性は十分にあると考えました。しかし、トイレ、調理場含

図表 16　休校になっている小学校

めた設備は十全ながら小学校のままであり、交流の拠点とするにはある程度の改修が必要になります。

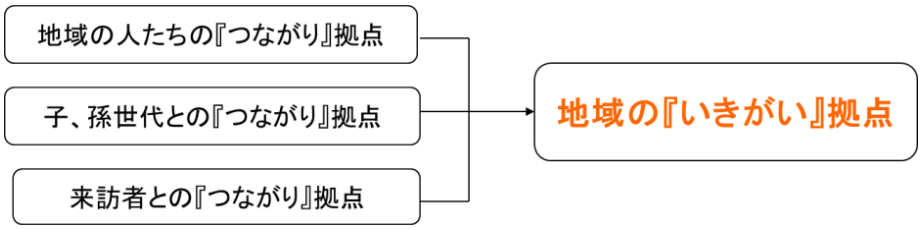
次に第 2 点の来訪者、親戚は春・夏・秋に自由に訪れられる宿泊、交流施設の整備ですが、親戚ネットワークの調査から親戚であっても、積雪量が多い冬季、正月でも帰省していないことが明らかになりました。このため来訪者が見込めない冬季は運営を行わないことにしました。また、地区の方々にとって『天空の郷』を運営していること自体が重荷となってしまわぬよう、運営に関しては人々の往来が盛んである土日祝日に限定したものが最適であろうと考えました。

第 3 点の地元の水・農産物・料理の活用は先ほどの調査結果でも述べた通り、上谷地区は清水、山菜に恵まれ、地元料理も手間、技がすばらしかったため、山菜をはじめとする山の恵みを活かした地元料理でもてなすことを考えました。そのためには今後とも料理の展覧会を春夏秋冬に実施し、料理のレシピ集を蓄積していくことが必要になります。また、ヒアリングを通じて 5 年ほど前までは上谷地区においてソバを栽培しており、各家庭でソバ打ちをしていたことがわかりました。上谷地区の特産品である山菜、キノコを活かすためにもソバを復活させることも目標としました。

最後に第 4 点として地域住民、親戚ネットワークによる運営主体組織づくりですが、『天空の郷』の運営主体を地域住民だけでなく、親戚ネットワークまで含めたことには 2 つの理由があります。1 つ目の理由は、県外への転出者は北が函館から南は鹿児島まで首都圏を中心としながらも全国各地に居住していたため、口コミによる宣伝効果が大きく期待できたからです。2 つ目の理由は転出した子ども世帯へのヒアリングから、上谷地区に残存している親世代が仮に亡くなってしまった場合、集落へ今までと同じ頻度、内容で通うつもりがないということが明らかになりました。このことから現在の親戚ネットワークは上谷地区、各集落とのつながりではなく、地区に残っている肉親とのつながりにとどまっていると考えられます。既に示した通り、上谷地区では高齢化が進行し、現在の親戚ネットワークの持続性には陰りが見えます。つまり、人とのつながりだけではなく、『天空の郷』を共に運営していくことにより集落とのつながりを形成し、上谷地区を支えている親戚ネットワークが今後も機能させることが重要だと思います。

『天空の郷』には 3 つのつながり拠点としての機能があります。1 つ目は集落住民が顔を合わせ、語らう場であり、薄れつつある集落住民間のつながり拠点。2 つ目は集落住民が来訪者と上谷地区の魅力を通じてつながるための拠点であるということ。3 つ目は親戚ネットワークのつながりを集落に対しても持たせ、今後も上谷地区を支えるつながりとすること。そして

図表 17　いきがい拠点の模式図



『天空の郷』が 3 つのつながり拠点として機能すれば、上谷地区のいきがい拠点として機能すると考えています（図表 17）。

V　おわりに

今回の調査によって上谷地区には水、山菜、キノコ、料理、古民家、景観など様々な魅力に溢れていることが明らかになりました。しかし、これらの魅力は地域住民の方々にとっては日々の生活であり、魅力が日常に埋もれていました。そこに私たちが調査に入ることにより、日常が異なる者の目で、言わばよそ者の目で見ることで魅力を再発見できたことは大きな成果だったと思います。さらに、この魅力を最大限活かすために『天空の郷』を提案させていただきましたが、この『天空の郷』ついても地区住民の方々の日常を圧迫しまわぬよう、運営時期、運営方法についても上谷地区の生活を考慮しました。

上谷地区がつながりを構築し、持続していくためにはまだ様々な課題があり、料理展覧会の開催やレシピ集の作成など私たちが協力できることはまだあると考えています。今後とも上谷地区の方々と協力し、上谷地区の持続について見出していきたいと考えています。何より、今回の調査によって培われた私たちと上谷地区とのつながりを今後とも持ち続けることが上谷地区のいきがい、持続における第一歩だと思います。

謝辞

今回の調査では上谷地区の代表者である田崎眞平様をはじめ、上谷地区の方々には温かく迎えていただき、大変お世話になりました。景観調査、ヒアリングへのご協力だけにとどまらず、とてもおいしい地元料理でもてなしていただきました。

西会津町長である伊藤勝様にはご多忙な中、料理展覧会にご出席していただき、私ども学生、集落住民の方々にとって励みとなるお言葉をいただきました。また、西会津町役場の方々には私どもと集落とのつなぎ役として、日程の調整、調査内容の伝達など様々な手助けをしていただき、ご尽力していただいたからこそ円滑に調査を進めることができました。上谷地区、西会津町役場の方々、並びに福島県地域振興課の皆様にはこの場をお借りいたしまして、心より厚く御礼申し上げます。

最後に、何かと至らない私ども学生を優しく見守り、懇切丁寧にご指導していただいた小金澤孝昭教授に御礼申し上げます。

仙台いぐね研究会
代表　　庄子　元